

転々一路

著者名(日)	内田 康夫
雑誌名	駿河台大学論叢
号	34
ページ	vii-xi
発行年	2007
URL	http://doi.org/10.15004/00001048





転々一路

内田 康夫

これまでの自分の来し方を振り返ってみる時、我ながら「職を転々として」というあまり芳しからぬ表現が当てはまってしまうナァと思わざるを得ません。それにもかかわらず、自分としては、これぞと思うことをひたすら追いつけて来たひと筋路であったという思いも、また偽らざるところです。

いわゆるモノごころがついたという3~4歳頃の、自分の中でいちばん古い記憶の一つは、神田明神の石段の下でハトに豆をやっている光景です。また、花壇に植えたチューリップの蕾が早く咲かないかとしゃがんで待っている自分です。あるいは、ジャムの空きビンか何かに入れたオタマジャクシを後生大事に両手で抱えている姿です。

そして、今、学生たちの卒業論文の指導で、ゴミに群がるカラスを調べさせ、外来タンポポの中に日本タンポポを探させ、タモ網を振るってハヤヤカジカを捕らせている自分がいます。

その一方で、職種はまさに転々としました。大学院を出て最初の勤め先は、製薬会社の三共でした(今は合併して第一三共です)。中央研究所の開発部門に配属され、一応まじめに研究に励み、トランクライザーの新薬の特許も取りました。3年後に、信頼していた所長が本社の取締役^{やましな}に栄転した後の新所長の人物が気に入らず、東大へ戻りました。

東大で非常勤講師をやったり、山階鳥類研究所の兼所属員になってトキの羽色変化の機構を調べたりしました(これは学会の賞をもらいました)が、そのうち日本野鳥の会の中西悟堂会長から会の本部事務局長をやるようにいわれました。ちょっと気おくれがしたのは、野鳥の会をそれまでの趣味の会から自然保護を標榜する財団法人にしてくれという条件がついていたからです。私は法人化の実務などイロハのイの字もわからず、しかも完全無給のボランティアです。第一、財団の基金など全くのゼロでどうするの?という感じでしたが、橋渡しをする人が出て、会長と一緒に三井不動産の本社へ押しかけ、当時の社長であった江戸英雄氏から、ともかく1千万円を引き出しました。この時、ひと言念押しする必要があるナ、と思いましたが、「これで、三井不動産の今後の土地開発に対して、こっちの口を封じるということにはなりませんので、念のため」といいました。江戸氏は苦笑して「ウ」とか「イヤ」とか口籠もり、中西会長は「フフン」と

鼻を鳴らしました。1970年の夏の暑い日でした。

当時の財団化の申請先は林野庁で、事務的な面では会長は私よりもオンチでしたので、仕方なくほとんど一人で準備し、その年の11月に認可を得ました。渋谷の宮益坂に面した第一園芸という花屋の2階に事務所を置き、電話を引き、事務員1名と専門職員2名を置きました。この専門職員は2人とも有能でしたが、そのうちの1人は有能すぎて稀代の野心家であることに気づきませんでした。ひと月とたたないうちに私のことを秘かに会長へ讒訴し、私は突然会長から詰問を受けました。私は神田の生まれで気が短く喧嘩っばやいのが欠点で、詰問されたこと自体に腹を立て、釈明もせずに「では、本日限りでお暇いとましますッ」とやっしまいました。会長も哑然として二の句が継げない様子でしたが、お互い覆水盆に返らずで私は会を去りました。会長とは数日後に仲直りしましたが、会の事務所には永久に足を踏み入れることはありませんでした。それからちょうど10年後、この野心家は中西会長を退任させましたが、さらに16年後、ある裁判で逆転敗訴し墓穴を掘りました。敗訴の原因は、第三者の証人として東京高裁から召喚された私の証言でした。

野鳥の会を去ってしばらくして、東大の恩師であった秋田康一教授やすかずから電話が来て、「埼玉県で初の医大を創ろうという話に来て、木下治雄教授が行くことになったんだが、君も手伝ってくれないか」という話でしたので、「ハァ、いいですけど」と答えました。秋田先生は後に茨城大学の学長になり、日本の放射線生物学を確立された方です。木下先生も生理学や三崎臨海実習の恩師で、私が自分の学生たちを三宅島や式根島に毎年連れて行くようになった土台を培って下さった方です。

1971年、埼玉医科大学設立委員会が始動し、木下先生その他、東京医科歯科大の落合京一郎教授うしろのすけ(泌尿器外科)、日本医科大の金子丑乃助教授(解剖学)、付属病院となる毛呂病院ろの丸木清美院長、それに埼玉県の栗原浩知事らを中心に精力的な申請作業が進みました。私は「また法人設立かァ」と思いつつ、桑畑の中に新築される校舎の実験室や図書館の設備・備品・図書などの選定と第1回入試問題の作成に当たりました。

1972年4月に医大は開校し、私は以後13年間、医学生の教育に専念しました。従来の医大や医学部の臭味のない爽やかな医学教育と実地医家の養成が目標でした。学長は落合先生、理事長は栗原知事が就任しました。私は、生化学、代謝論、分子生物学、免疫理論などの講義と、生物学実習を助手2人と共に担当し、夏期休暇中には三宅島の特別実習を実施しました。学生たちはよく懐なついてくれ、彼らとの深い交流は30年以上経た今日でも続いています。また、教養課程りょうみん(医学部では進学課程ていのすけといいます)の哲学担当の禅僧でもある秋月龍珉教授、フランス語担当の田辺貞之助教授らとカリキュラム改革に取り

組み、親交を結びました。

しかし、10年が経過し、理想を掲げた創立メンバーが櫛の歯が欠けるようにいなくなるにつれ、学内に実利や勢力や権威に傾く一派が抬頭して来ました。特に、木下先生の去られたことが大きな傷手となりました。それでも3年は我慢をしましたが、もう見切り時かなァと思うようになり、今度は文科系で教えたいなどと周囲に吹聴したりしました。周囲はそれを本気とは取りませんでした。後任の段取りがつく時期に、私の在職は今年度限りと宣言しました。木下先生、秋月先生、田辺先生ら大正デモクラシーのリベラル派が去ったあとは、解剖・生理・薬理・病理といった基礎医学系の教授連が惜別の宴を開いてくれました。

ところで、私の生物学上の立場、平たくいえば関心の在り処は、冒頭にある通り、生きたままの丸ごとの生きものとその暮らしぶりです。そういう動植物の図鑑や解説書の著者は、東大や京大や北大の先生が多かったので、結局、近いところで東大に入りましたが、教養学部では勉強より60年安保の学生運動に明け暮れていました。その中には最首悟しゅさとる にしべすすむ かるうじ、西部邁、唐牛健太郎らがいきましたが、左翼思想には全くなじめず、デモの途中でも鳥や虫が気になっていました。専門課程へ入ってびっくりしたのは、鳥や虫の専門は全くなく、すべてが実験室内の生理・生化学だったことです。当時は、ワトソンとクリックによるDNAの二重螺旋構造の発見を端緒とした分子生物学の興隆期であり、分子生物学に非ざれば生物学に非ずといわれた時代でした。これこそ生命体や生命現象の基本構造を解明する最高の学問であると覚り、鳥や虫から興味が離れました。国際的には、ニーレンバーグ、オチョア、シュピーゲルマンらが華々しい成果を挙げており、私たちは分子生物学のテキストといわれた「コールド・スプリング・ハーバー・シンポジウム」の論文集を輪読したり、国内ではつい先頃逝去された渡辺格慶大教授の講演を聞きに行ったりしました。つまり、鳥とか虫とかの生きた丸ごとのマクロバイオロジーから、分子・原子レベルの生命現象というミクロバイオロジーへと大きく視点が切り換ったわけです。

東大の大学院では、秋田先生の放射線生物学教室に席を置いて、放射線という手法によるミクロバイオロジーに携わり、また、三共中央研究所では、薬理学的手法を用いたミクロバイオロジーに関わって来ました。

ところが、野鳥の会の頃から、またマクロバイオロジーに視点が戻って来たのです。ミクロがわかれば、その積分としてマクロもわかると思ったのはどうも間違いだったのでないかと気づき始めました。どうやら生きものというのは、個体レベルの下と上の階層、つまり、臓器、組織、細胞、高分子とミクロへ向う諸相と、個体、個体群、群集、生態

系とマクロへ向う諸相とでは、決定的な不連続面が介在するらしいのです。鳥も虫も、もちろん人間も、生きものとして大事なところは、その部品の構造や機能ではなく、丸ごとの生きものとしてどう行動するか、どう意思決定するかです。これを全体像として眺めると、ミクロは共通性重視となり、マクロは相違性、流行りの用語では多様性重視となります。現代医学の最大の欠陥も、まさにミクロ偏重にあるといえるでしょう。

このような思索過程を経て、埼玉医大時代には、学生への講義は相変わらずミクロ主流でしたが、自分の仕事としては大きくマクロへシフトしていました。その結果、自分の仕事場の中心は西那須野の千本松農場となり、農場と大学とで週の半分づつを過すようになりました。千本松農場では、主にツバメ類の個体群生態学を志向しましたが、この方向は、埼玉医大の次の時代、つまり文化庁の天然記念物、具体的には鹿児島県出水^{いづみ}平野のツル類の調査へと引き継がれました。

埼玉医大の時から予備的に始めたツル類の調査の論文が文化庁から目をつけられ、「内田さん、大学辞めたんだって。じゃあ、ツルやってくれない？この論文の手法でサァ」ということになりました。この仕事は、ツル類の総合調査として、文化庁から5年間、計約3000万円の予算で受けることになり、論文としては第1報から第11報にわたりました。

そして、この調査の途中で、駿河台大学からの就任打診が入り、文化庁の5年目が1990年3月に終了したのに引き続いて、同年4月、経済学部発足と共に再び教壇に立つことになりました。その時はもう51歳、ここが最後の勤め先になると予感されたので、今迄の反省に立って自分に対していくつかの規範を設けることにしました。まず組織のことにあまり拘泥しない、徒党を組まない、いうべきことはいうが無理押しはしない、学生の教育を第一とする、自分の研究は学生指導と共に行なう、細川ガラシャ夫人ではないが、「散りぬべき時知りてこそ世の中は・・・」でイヤがられないうちに退職する、といったことでした。

担当科目は環境生物学と銘打ち、内容はミクロを踏まえた上でのマクロとし、医大末期に文系で教えたいといったことが図らずも叶ったので、生物学や医学だけでなく、法、政、経、社会、国際、歴史、文化なども含めた総合科目を組み上げることにしました。もう一つ、大学周辺の環境がよく、その一方で今の学生たちは野生の生きものの知識がまるで乏しいので、広報的なもので生きもののコラムを持ちたいと思いました。これは「大学生物ごよみ」で実現し、先頃、第100回(実は103回)で終了しました。

最後に、「生物ごよみ」に載せたものも含め、拙句20句を記して本学を偲ぶよすがと致します。

新学舎 風な狂ひそ 花嵐 (就任時入学式)
ふるまち ゆ はるはやて
旧街を 往けばつばくろ 春疾風
春うたた ひねもす楽し 四十雀
あわあわ ひさやま
淡々と 加治の低山 若葉萌ゆ
道草の子らにほろほろ 栗の花 (矢嵐) やおろし
くろはえ さぎ
黒南風に よろぼふ鷺の白さかな
ひぐらしや 神言聞かむ 古社 (秩父) ふるやしろ
若き日は 還らず闇の 青葉木苑 あおばづく
晶子の碑 雲沸く浦曲 式根島 (臨海実習) うらわ
麦藁帽 小径さらさら 浜面 こみち はまおもて
ゼミの女男 浜の白きに飛び跳ねつ めお
見送るも 見送らるるも 日灼面 (島波止場) ひやけづら
束の間に 日は移ろへり 曼珠沙華 まんじゅしゃげ
夕日さす 雑木紅葉のひとところ (天覧山) ぞうき もみじ
短か日や 学窓高く 灯を連ね
しぐれ のきば びわ
時雨くる 軒端ふさぎて 枇杷の花
寒けれど またおほどかに 日の昇る (新年)
試験官 銀縁眼鏡 冷たかる (期末試験)
旅立ちの日はうらうらと 胡蝶かな (卒業式)
入間川 加治の里山 惜春賦 (退職)